

# 住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1874号 2007年05月07日(月)

## 《 Nicolas Sarkozy won the French election 》

今後の先進国の政治・経済体制の選択で大きな方向付けをすることになると私が注目していたフランスの大統領選挙は、民衆運動連合（UMP = 右派）のニコラ・サルコジ候補の勝利に終わりました。最終結果は出ていませんが、暫定で53.1%の票を獲得して、左派である社会党のセゴレーヌ・ロワイヤル候補の46.9%を大きく上回った。これも暫定だが投票率は85%と非常に高く、前回02年の大統領選挙の67.6%を大きく上回ったことは確実で、今回の大統領選挙に対するフランス国民の関心の高さが証明された。

なぜこれほど投票率が高かったのかに密接に関連するが、筆者が今回のフランス大統領選挙に注目した理由は、その両者の主張の鮮明な対称性です。国民もこの両候補の対称性故に論争は盛り上がり、フランス国民も今後の国の方向選択で投票所へより多く足を運んだのだろう。

むろん実際に大統領になった場合には、両候補ともその対称的な主張が現実との折り合いを迫られることは十分に予想された。しかし、一時は次期フランス大統領の第一候補とされ、国際主義者として世界にその名前を知られたドビルパン元首相が労働対策で大きく失敗して大統領選挙からの撤退を余儀なくされた後は、ともにどちらかと言えば国内派の（国際的にはあまり有名ではないという意味で）、しかしフランスの閉息感の打破では対称的な処方箋を語った二人の争いになった

落選したロワイヤル候補の主張は、言ってみれば「社会民主主義」の徹底である。理想とするのは北欧型の福祉社会だと言われた。最低賃金の引き上げなどが公約で、どちらかと言えば「大きい政府」の主張。対して、当選したサルコジ候補は対米関係の改善を標榜し、「小さい政府」を標榜、さらにはフランス伝統の平等主義を捨て自由競争を重視する英米型の経済政策路線を提唱していた。これは、米国と距離を置きフランス独自の外交政策を目指し国内経済に積極的に介入する保守派主流思想のド・ゴール主義とは一線を画す。

むろん、単純に割り切れない面もある。ロワイヤルはリベラル的な思想を持つと言われるが、一方で「正しい秩序」の樹立を理想に掲げ、非行少年少女への軍隊式教育をはじめ、国旗掲揚や国歌斉唱を推奨するなど国家主義・権威主義的な主張をしていた。一方サルコジは、ドビルパンに比べてアメリカにとって安心できる信奉者かと言えば、そうでもない面がある。移民に対しては非常に厳しい態度をとっており、移民に寛大なアメリカの政策と相容れ

ない。

### 《 Love France or leave it 》

しかし筆者がもっとも注目したのは、経済の停滞（9%の失業率、“欧州の病人”と呼ばれる弱い経済など）、欧州の中での存在感の低下に悩むフランスの国民がサルコジ的経済活性化策を選ぶか、それとも平等と福祉を優先するロワイアル的な処方箋を選ぶかでした。迂遠な議論のようであり、日本を含めて世界中の国々が直面している「格差問題」にどう対処するのかという問題とも関連する。日本でも安倍政権は「経済活性化」による危機脱出を基本路線にしている。対して、必ずしもそれぞれの戦略が明らかではない面があるが、「より平等重視」の考え方が野党には強いように思える。

国情が違うから一概には言えない。しかし、どちらかと言えば欧州型社会民主主義を長らく体験してきたフランスの国民の選択は興味深いものになる、と筆者はずっと思ってきたのです。フランスの選択は、他の先進諸国の選択に繋がる面がある。

日本に比べれば小さいが、フランスのGDPは世界第6位に位置し、欧州の中ではドイツに次いで二位。加えてフランスは「自由、平等」といった理念ではアメリカと同様に母国と言える国であり、世界的な影響力は強いし、抱える外交団の数はアメリカに次ぐ。言ってみれば、いまだに世界では非常に影響力の強い国である。

その国が、将来の進路として対照的な処方箋を持つ候補のどちらを当選させるのか。それはまた、日本を含めた先進各国が今後選ぶ一つの道への示唆になると考えたからである。

こうした中、フランス国民はその選択でサルコジを選んだ。第一回投票の流れからサルコジの当選は予想されたが、改めて「サルコジ・フランス大統領」と口にしてみると、新鮮な響きがあると同時に、今後に対する不安感を覚える。それは私だけではないだろう。今後何が起こるか、予測しがたい面が強いからだ。

新しい大統領が当面今後取り組むのは

- 1．膨れ上がった官僚組織の整理、削減
- 2．厳しい移民対策
- 3．強い労働者保護の要素を持つ労働法規の改正
- 4．より自由な経済活動の容認とフランス経済の競争力回復

など。しかし、それぞれで既得権者の強い組織的抵抗が予想される。特に労働組合とイスラム系移民との対立は厳しいものになる可能性がある。サルコジの選挙キャンペーンには、「Love France or leave it」「Stop with your excuses」などのスローガンが目立った。極めて移民や労働組合には挑戦的で、こうした対立関係をサルコジがどう乗り切っていくか。

またEUとの関係はどうなるのか。フランスは2005年の国民投票で、EU憲法を拒否した。サルコジは、「私はねっからの欧州人である」としながらも、EUとその指導者はそれぞれ

の国の国民の声に鈍感であってはならないとも述べている。サルコジは EU に対する明確な態度を今後明らかにすると思われる。とすれば、ユーロがどう動くのか。月曜日のアジア市場の動きを見れば、ユーロには対円（163円台）でも、対ドル（1.36ドル前後）でも大きな動きはないが、サルコジの政策が明らかになるに従って、ユーロにも動きが出てくるだろう。

ニコル・サルコジ（52才）は父方がハンガリー移民（下級貴族という説が強い）であり、母親はギリシア系ユダヤ人とされる。シラク大統領が背が高かったの対して、サルコジ氏はどちらかと言えば背は低い。まだ選挙結果が出たばかりで、今後どのような手順でサルコジが政策を打ち出すのか分からないが、伝統的フランスの政治家のイメージが強かったシラク時代に比べて、フランスは大きく変化するに違いない。その余波は、ユーロの先行き、EUの今後などにも大きな影響が出てくるものと予想される。

更に言えば、来週にはイギリスのブレア首相が辞任を表明する。この結果は、欧州の顔だった二人が一気に変わる。欧州の政治は大きな変化の季節を迎えた。

### 《 How far can New York mart go ? 》

先週一週間の市場で目立ったのは、ニューヨークの株式市場の強さでした。経済指標では弱さも目立つ米経済の中であって、株式市場だけが強い理由については前々号で取り上げました。4月23日（1873号）で要旨次のように指摘した。ニューヨーク株の強さの背景です。

「第一は引き続きの長期金利の低さ。景気拡大が続いているにもかかわらず、長期金利の水準は指標10年債の利回りで4.65%前後と相も変わらず5.25%のFF金利水準を大きく下回っている。

第二は、一時のような資源先物市場に勢いがいないこと。世界の投資家は原油をやり、穀物をやり、そして今は美味しい投資対象を先物市場に見いだせないでいる。つまり資金の目指す市場が限られてきて、株式市場が注目されている。

第三に、アメリカ経済の先行きに対する懸念が強いが故に、同国企業の先行き見通しも控えめだったが、蓋を開けてみたら米企業収益が予想を上回っている、という現実」

このような状況は今も続いている。日本や中国の市場は休みでしたが、この強さに引きずられるように開いていた各地の株式市場は基本強地合いで推移した。

より短期的な動きをニューヨークの株式市場のダウで見ると、先週は金曜日まで4日連続の史上最高値更新を記録した。この中では、予想を下回った雇用統計でさえも「好意的な解釈」をされて強材料となって、加えての企業合併ニュースや企業業績の好調を背景に株価は上昇した。このところ続いているマーケット・トレンドで数字でもニューヨーク市場の強さは立証される。具体的には、過去26営業日のうち実に23営業日で上昇した。ウォー

ル・ストリート・ジャーナルによれば、「このようなニューヨーク市場の強さは、1944年以来のこと」だという。

指標で強いのはニューヨークのダウ平均だけではない。より幅の広い指標であるDJウィルシャー500も先週金曜日には史上最高値をつけたし、ラッセル2000小型株指数も4月26日に記録した史上最高値に近いところで週を終えた。SP500は1500を上回って推移し、引値は1505.62で史上最高値からそれほど遠くないところで推移。NASDAQ総合指数は六年ぶりの高値にあり、過去9営業日の中で8日上昇した。年初来の上げ幅は6.5%に達した。

先に指摘したように弱材料もある。例えば4月の米雇用統計。非農業部門就業者数の伸びは11万の予想に対して、88000人増と9万に達せず過去2年間で最も弱かった。また過去2ヶ月の数字も下方修正され、失業率も4.5%に上昇した。「米経済は弱い」と判断されて、株式市場にとっての弱材料とされてもおかしくないのに、「利下げの可能性が高まった」との理解で、株価は上げた。

株価の上昇に拍車を掛けているのは、極めて活発なM&Aの動きである。しかも今の動きは、「誰もが知っている企業を対象にしたもの」が多い。つまり目立つ。イギリスのマスコミで大きな力を持つに至ったルパート・マードックのグループは、今度はウォール・ストリート・ジャーナルを発行しているダウ・ジョーンズ社に触手を伸ばしている。一方、通信社として有名なロイターに対しては、カナダのトムソン（情報サービス大手）が買収交渉に入った。そしてもっとも新しいところでは、お互いにグーグルの台頭に頭を悩ませているマイクロソフトとヤフーの提携交渉話。もっともこの最後の話はどのくらい進んでいるのかは色々な報道があって不明だ。真相は分からなくても、ヤフーの株価はこの報道で10%も上昇した。

「一体このような株価はどこまで続くのか」というのはウォール街が関心事項だが、その点を占う上でも注目されているのが今週のFOMCの後に発表される声明。FOMCのものは「金利の据え置き」との予想が多い。しかし、その後の声明が「より利下げを示唆するもの」になれば、米経済鈍化予測にもかかわらず株価は上げる可能性があるというわけだ。もっとも、宴はそう続くものではない。「Enjoy the party but dance close to the door!」というのが当たっているのかも知れません。

今週の主な予定は以下の通りです。

5月7日（月）	日銀政策決定会合議事録公表（3月19～20日分）
5月8日（火）	米3月卸売在庫 中国株式市場取引再開
5月9日（水）	3月景気動向指数 米MBA住宅ローン申請指数 米FOMC

	英中銀金融政策委員会（～10日）
5月10日（木）	4月景気ウォッチャー調査 米3月貿易収支 米シカゴ連銀総裁スピーチ クロズナー米FRB理事スピーチ ECB理事会
5月11日（金）	米4月生産者物価 米4月小売売上高 米3月企業在庫

### 《 have a nice week 》

長い連休いかがでしたか。レギュラー番組を抱えている身としては長いお出掛けが出来ずに基本的には東京近郊にいましたが、それはそれで何日か出掛けました。特に記憶に残ったのは、竹林での非常に短い間ですが筍取りでしょうか。そのために行ったのではなく、ゴルフ場の竹林の中にぼこぼこ出ていたのを、キャディーさんの案内で何本かとったのが面白かった。

見ていたら、別に掘るではなく足で蹴ったりして根本からぼきっととるのです。それが食用の筍取りの方法かどうか知りません。食用はちゃんと掘って掘るのでしょうが、それが結構面白い。ゴルフ場にしてみれば、あまり竹が増えても困るので出来るだけ筍は採って欲しいのだそうです。

ところでメジャーのニュースですが、松井が日米2000本の安打を放った試合の7回表が終わった段階で、オーナー室からロジャー・クレメンスがスタジアムの観衆に対して、「私はもうすぐヤンキースタジアムに戻ってくる」と発表した。「ロケット」と言われた大投手のヤンキース復帰。うーん、不甲斐ない投球を続けている井川の先発の座は危ないという事です。

それでは皆様には良い一週間を。

《当「ニュース」は住信基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したものです。正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》